

## おわりに

福井地震は、未だ解明しきれていない、未知の部分を持つ地震災害であった。この調査研究の取り組みを通して、福井地震にさまざまな角度から見直し、その実像を解明し今後の都市直下地震対策に活かすべき教訓を読み取ろうと取り組んだ。しかし、残念ながら、完全に読み解くことは、まだできていない。その背景には、資料の制約が、思いのほか厳しいものであったことである。

現代の地震災害という視点と同時に、GHQの統治下で、戦後処理の中での地震災害であって、災害調査には建築学会を始め学会も取り組んだが、その調査資料は十分に保存されているわけではなかった。もっと掘り起こされる原資料があるように思われる。今回の調査研究を通して、究明し尽くしたというよりも、まだ何かはどこかに残されているのではないか、そんな思いで筆を置かねばならないというのが本音である。

しかし、その中で、飛躍的に進展した地震学的に福井地震を見直したこと、地震学のみならず福井地震の地震地形や断層学的に新しい知見を得られたこと、また、戦災に引き続く複合災害との言える特徴的な地震災害が、福井市の都市復興にどのような取り組みをさせたのか、その中で、当時の被災者の災害復興への不屈の取り組みとしぶとさなど、今日の地震災害にとって学ぶべきことなど、明らかにすることができた知見も少なくないと思う。

たとえば、GHQの報告に見られる日本人についての評価、「日本人の道徳感覚 (the morale of the Japanese) はすばらしい。ヒステリックな傾向はない」とか、「食料欠乏にも拘わらず、住民に集団ヒステリー現象は見られない」などは、今後とも災害や危機管理に冷静に対応できると日本人として誇りを持って良かったろう。

また、復興の取り組みは、今日的に言えば、福井地震発生時に戦災復興事業として新しい都市づくりに取り組まれていたことが、震災復興の迅速な都市づくりを可能にしている、「事前復興対策」の重要性と可能性を示唆している。また、福井県民の震災からの復興の取り組みは、今日よりも公的支援が手薄な中での「自助復興」の取り組みであるとも言え、まさに「フェニックス」の取り組みであったと、改めて思うのである。

本報告が一つのきっかけとなって、各方面から新たな資料の発掘や調査研究が促進され、さらに多くの教訓を学んで行けるように祈念しながら、この報告書が福井地震の教訓を 21 世紀に伝え、未来の地域防災の取り組みを少しでも前進させることができれば、幸甚とするところである。